

【書評】

ピーター・クラーク著，関谷喜三郎・石橋春男訳
『ケインズ 最も偉大な経済学者の激動の生涯』
中央経済社，2017年

Peter Clarke,
“Keynes: The Rise, Fall, and Return of the 20th Century’s
Most Influential Economist”, Bloomsbury Press, 2009

木村雄一
Kimura Yuichi

ジョン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946) は、社会科学に関心をもつ研究者や学生であれば、あるいはそうでなくても、第二次世界大戦勃発の一因となった世界大恐慌を救うための理論や政策を提供し、大戦後の国際経済秩序の形成に多大な影響を与えた経済学者の一人として、よく知られている。ケインズは、ケンブリッジ学派の創始者であるアルフレッド・マーシャルやアーサー・ピグーによる理論的な手ほどきを受けたが、現実の問題を説明するための理論を常に探求し、『雇用・利子及び貨幣の一般理論』（1936年）では「有効需要の理論」を打ち立て、「ケインズ革命」と呼ばれる新たな理論革命を起こした。高等学校の教科書『政治・経済』では、ケインズの名は「有効需要」や「修正資本主義」と結びつけて教えられ、大学の初歩的な経済学やマクロ経済学では、乗数理論や流動性の罫、IS-LMモデルやAD-ASモデル、財政政策・金融政策とともに言及される。さらにケインズは編

集長や芸術愛好家、投機家などの様々な顔を持っていた。こうしたケインズの理論・政策・思想に関する研究は、ロイ・ハロッド氏、ロバート・スキデルスキー氏、ジル・ドスタレール氏による海外の研究はいうまでもなく、国内のケインズ研究で思いつくだけでも、伊東氏、平井氏、吉川氏、根井氏、伊藤氏らによる多くの成果が存在し、まさに汗牛充棟である¹⁾。移り変わりの激しい経済学界で、20世紀前半に活躍したケインズの影響力が今でも強いのは、昨今のリーマンショック以降、ケインズ政策の意義が再評価されたからである。経済学の研究は自然科学と違い、過去の学説であっても「復活」するところにその研究の醍醐味がある。これは、ケインズばかりでなくカール・マルクスやアダム・スミスにも当てはまることである。こうした手厚いケインズ研究者の中、ケンブリッジ大学教授を務めた歴史家のピーター・クラーク (Peter Clarke, 1942-) が執筆した *Keynes, The Rise, Fall, and Return of the 20th century’s most*

influential economist, Bloomsbury Press が 2009 年に出版され内外で注目を浴びていたが、このたび本学の関谷教授が中心となって本書の訳書が公刊された。この書はコンパクトな著書であるが、著者の幅広い知識と、これまであまり紹介されなかったケインズ関連の一次資料を用いて、ケインズの一生を生き生きと描いた著作である。本書で議論されている内容をかいつまんで見よう。本書は、次のような内容で構成される。

イントロダクション

第 1 章「宗教と不道徳」

ジョン・メイナード・ケインズ

1883 年—1924 年

第 2 章「天空の最左翼で」

ジョン・メイナード・ケインズ

1924 年—1946 年

第 3 章「長期では、われわれはみな死んでしまう」

経済政策の再考察

第 4 章「アニマル・スピリット」

経済理論の再考察

エピローグ

イギリス・ケインジアンとアメリカ・ケインジアン

まずイントロダクションは、2008 年の株価大暴落以降、ケインズが再び注目を浴びていることを取り上げる。それは、ケインズの理論や政策に対する高い評価（1920～1960 年代）、フリードマンらの反ケインズ主義によるケインズ理論の黄昏（1960 年代後半～2008 年）、そして今日のケインズの“復活劇”（2008 年～）は、まるで「ジェットコースター」のようであると紹介される。ケインズの好敵手であったヨゼフ・アロイス・シュンペーターや制度派経済学者ジョン・ケネス・ガルブレイスの見解を織り交ぜつつ、「ケインズを理解したければ、ケインズの時代状

況とケインズの人生から始める必要がある」（p.29）と述べ、第 1 章が始まる。第 1 章は、「宗教と不道徳」を扱う。それは、ケインズの家族関係やケインズの聡明さ、大蔵省のポスト争いに敗れたインド省での経験とフェローへの道程について、そして「ケインズの思考に終生にわたり影響を与えた」（p.51）『確率論』（1921 年）の執筆とジョージ・エドワード・ムーアとの関係、ブルームズベリー・グループや使徒会メンバーとの関係、ケインズの自由主義思想の形成や自由党支持、投資家としての成功や『平和の経済的帰結』（1919 年）出版を巡る経緯について、簡潔かつ詳細に論じられている。こうした記述は、ケインズの「信条」や「同性愛」と関連づけて赤裸々に描かれていることが、本章の特徴である。第 2 章は、「天空の最左翼で」というテーマである。ここでは、ケインズが 1924 年 5 月に失業に関する思い切った提案をしたこと、プライベートでは 1925 年のロシアのパレリーナであるリディア・ロポコヴァと結婚したことで、旧友ヴァージニア・ウルフを除いてブルームズベリー・グループと疎遠になったこと、そして理論面では『貨幣改革論』（1923 年）、『貨幣論』（1930 年）、『雇用・利子及び貨幣の一般理論』（1936 年）へと昇華し、ブレトンウッズにおける国際流動性に関するハリー・ホワイトとの闘い、ケインズの死が論じられている。ここで興味深いことは、ケインズとリディアの「愛」の記録がすべての出来事と結び付けられて論じられていることである。そして当時の政策や理論に対するケインズの「急進主義的な考え方」（p.102）が、「時代遅れの反資本主義の教義」（p.102）や「バリケードを築くことや階級闘争ではなく、知的な世界のものであった」（p.102）と述べる。第 3 章は、ケインズの有名な言葉「長期では、われわれはみな死んでしまう」という視点から、ケインズの経済政策を再考している。旧平価による金本位制への復帰を行うウインス

トン・チャーチルへの批判、経済の自己調整メカニズムで失業を克服することができると考える大蔵省への批判などを満遍なく紹介し、ケインズが理論に先駆けて「正統派思考（均衡予算、自由貿易、金本位制）」と対決した政策提言を行ったことが論じられている。その記述は鮮やかである。第4章は、ケインズの経済理論が「アニマル・スピリット」の観点から検討されている。『貨幣論』を巡るケインズの理論的エッセンス、ケインズとデニス・ロバートソンやラルフ・ホートレーとの関係、クヌート・ヴィクセルやストックホルム学派の事前・事後の考え方や貯蓄と投資の乖離の問題、『雇用・利子及び貨幣の一般理論』における保蔵の問題やケンプリッジ・サーカスとの関係が見事に簡潔かつ詳細に紹介されている。最後のエピローグとして、イギリス・ケインジアンとアメリカ・ケインジアンとの所見が述べられている。ここでクラークは、ケインズがアメリカに大きな影響を与えたことや、ケインズ自身がイギリスとアメリカの歴史的風土の違いを解さなかったこと、そしてアメリカはアルビン・ハンセンが中心となってケインズ理論を受容し、アメリカ・ケインジアンは財政出動を主体としたことに言及している。クラークは、ケインズとケインジアンの相違を強調し、「ケインズ自身は、政治改革は可能だし、望ましいことだと信じる自由主義者であった」（p.258）と述べた。今日においてケインズの名前が呼び出されたのは、短期と長期の点で政府の活動を正当化し、「現代の新規な経済困難に積極的に取り組むためのアプローチにおすみつきを与える」（p.260）ためであると述べ、本書を締めくくる。

こうした記述から明らかなのは、本書が文献学的に「新しい」ケインズ論を示したわけではないことである。各章それぞれで述べられていることは、代表的な研究で論じられてきたことばかりである。しかしながら本書

は、こうしたケインズ研究の様々な領域で明らかになっている事柄を、コンパクトな書物に収め、何より「愛」と「自由」に生きたケインズ像を理論・政策・思想の点から見事に描いたという意味で稀有である。本書は、何よりケインズの人間的な魅力を見事に再生させており、読者はケインズのことを好きにならずにはいられないだろう。クラークは、まるで十分に揃っている様々な食材を見事に組み合わせ、人に感動を与える食事を提供する優れた料理人のように、人間ケインズを魅せた第一級の書き手である。本書は、ケインズと同じケンプリッジに所属したクラークの筆致だからこそなしたもので、著者のユニークな「解釈」が与えられている点で、実に「新しい」研究である。

本書全体を通じて評者が考えさせられたことを三点ほどあげておこう。第一にケインズの理論である。クラークは、ケインズの理論的核心が「アニマル・スピリット」であるとし、「不確実性」や特異な「確率論」に十全と踏み込み、「ケインズ主義」＝「財政支出」という観点から、ニューディール政策やイギリスの雇用政策、大恐慌後の政策を論じている。評者はこの解釈に異存があるわけではない。しかしケインズが「貨幣」理論家で、『一般理論』の革命的本質を「貨幣」という観点から見ると、本書と別の解釈も成り立つだろう。たとえば、アメリカの貨幣理論家のポール・デヴィッドソンのように、貨幣利子率、自己利子率といった独自の利子論や貨幣的な生産理論を踏まえた上での「不確実性」と見れば、ケインズ革命の本質の解釈は異なってくるだろう²⁾。第二に、ケインズ革命が不況に喘ぐアメリカにどのように影響を与えたかである。本書は、アメリカのニューディールの側面について、フランクリン・ルーズヴェルトやヘンリー・モーゲンソーとの関係、そしてアルビン・ハンセンの関係からケインズ主義＝財政出動として紹介されている。実際、

モーゲンソーが財政均衡主義者であったことはよく知られている。しかしながら、当時の影響力あるシカゴの経済学者であるジェイコブ・ヴァイナーが回想しているように、ケインズ革命が生じる前にアメリカの経済学者はすでに赤字財政を行うことでインフレが生じることに気がついていた³⁾。さらにハーバート・フーバー大統領でさえも財政支出に前向きだったと言われるし、ウィスコンシンの理念から社会保障に尽力したジョン・ロジャーズ・コモنزの理論や政策の検討も重要である。したがってニューディールの問題は、ハンセンだけを取り上げてケインズの財政支出論を受容したと論じるほど単純ではないだろう。第三に、アメリカ・ケインジアンとイギリス・ケインジアンとの相違である。本書は、両者の相違が触れられているにもかかわらず、その後のケインジアンへの記述・展開（イギリスのニコラス・カルドアやジョン・ロビンソン、アメリカのポール・サミュエルソンやロバート・ソローなど）がほとんど書かれていない。現代の経済学では、新古典派のなかにケインズの考え方は取り込まれている

し、ミクロ的基礎づけとしてのマクロ経済学も展開している。さらにイギリス・ケインジアンは「成長」のみならず「分配」の経済学として独自の路線を歩んだ。現代のケインジアンがケインズとどのように異なっているのかという点について、著者の見解が書かれていないことは残念である。ひょっとするとクラークは、読者がその問題をじっくり考えることを期待して、あえてそれを書いていないのかもしれない。

このように示唆に富むクラークのケインズ論を、解りやすい日本語で読むことができるようになったことは、本学の関谷教授の多大な貢献であろう。研究者の手になる訳業は、研究論文を書く以上に膨大な労働量や時間や手間が取られる作業である。ケインズを知ること、ケインズの政策・思想・理論的変遷を理解すること、そしてケインズの考え方を現代の経済社会に活かすという視点からも、本書をできるかぎり多くの研究者や社会人、そして経済学を学んでいる学生に手に取ってもらいたいものである。

(注)

- 1) ロイ・ハロッド著塩谷九十九訳『ケインズ伝』（東洋経済新報社、1967年）、ロバート・スキデルスキー著山岡洋一訳『何がケインズを復活させたのか？』（日本経済新聞出版社、2010年）、ジル・ドスタレル著鍋島直樹・小峯敦監訳『ケインズの闘い』（藤原書店、2008年）、伊東光晴『ケインズ』（岩波新書、1962年）、吉川洋『ケインズ』（ちくま新書、1995年）、平井俊顕『ケインズの理論』（東京大学出版会、2003年）、根井雅弘『ケインズを読み直す』（白水社、2007年）、伊藤宣広『投機は経済を安定させるのか』（現代書館、2016年）。なお内外のケインズの最新の研究動向は、Atsushi Komine, Recent

Research on Keyens: After the Financial Crisis of 2007/8 (『経済学史研究』58巻1号、2016年7月)を見よ。

- 2) ポール・デヴィッドソン著原雅彦監訳『貨幣的経済理論』（日本経済評論社、1984年）、ポール・デヴィッドソン著永井進訳『ケインズ経済学の再生』（名古屋大学出版会、1994年）、ポール・デヴィッドソン著小野谷俊夫訳『ケインズ』（一灯舎、2014年）。
- 3) ジェイコブ・ヴァイナー「ケインズ一般理論に関するわたくしの1936年の批評に対するコメント [1963年]」ロバート・ルカッチマン編中内恒夫訳『ケインズ経済学的发展——『一般理論』後の三〇年の歩み』（東洋経済新報社、1967年）。